



『世界の出産 儀礼から先端医療まで』

評者・カーティー 倫子 アクエリエル京都・開業助産師

「人生のうちで、何度もないことだから」という言葉は、人生の一大イベントを語る上でよく使われる。出産もこの一大イベントのひとつと捉えて間違いないだろう。「何度もない出産」は特別なことであるために、確実性や安全性を求める傾向にあり、医療の介入なしに語られることはなくなってしまった。そして、先進国では過度の医療化への反省から、その問題点をあぶりだす作業がなされてきている。

情報があふれ、欲しいものが手に入りやすい先進国においては、「医療消費者」という言葉まで登場し、出産の医療化や商品化が極端に進んだ状況がうかがえる。現在の日本の出産事情を「ファッション化する出産」と捉えた文章で始まる本書は、まず近代化が加速している上海での医療化について語り、タイでのメディカルツーリズムなどの医療の商品化、つまり市場化についても紹介する。

そして「アジアの出産」をテーマに、出産の医療化はもはや問題とはされておらず、近代化とは急速な出産の医療化の程度を示すと指摘し、途上国におけるリプロダクション市場の拡大とそのニーズに合わせたサービスの提供について言及する。出産のダイナミックな変容をあぶりだした後、世界中の女性の出産事情を報告し、社会保障のあり方やその変遷、歴史を踏まえることによって明らかになる今後の出産への

医療以外の視点から 世界の出産を語る



松岡 悦子／小浜 正子 編
定価 3360 円(本体 3200 円＋税 5%)
A 5 判／勉誠出版／2011 年

展望などについて幅広く紹介する。医療というレンズを通して見てきた出産を、敢えてその周辺にある社会・文化・歴史を通して多角的に捉え、理解を深めようとする試みが、本書の最大の魅力である。

出産に絡む課題、そこにはもちろん当事者である女性の身体、意思があり、さらに社会的・文化的背景が加わることで、一本線で区切ることのできない複雑な問題が混在する。商業化・消費化されていく出産ビジネスに対して世界的な規範や規制を設けることは困難であり、代理懐胎や精子・卵子提供などのビジネスは倫理的規範以

前にすでに確立されようとしている。さらに社会的・経済的弱者への身体的搾取問題も複雑に絡んでくる。グローバリゼーションに伴い、利用者と供給者の間で今後ますますの不均衡を生みだしていくことは想像に難くない。医療提供が複雑な問題を提起する一方で、安全なお産に手が届かず、単純に医療へのアクセスさえ困難な国もいまだ多くあることも事実である。

現在の世界中での出産のあり方を、医療以外の視点で客観的かつ批判的に語る本書は、読者にとってあらためてリプロダクションのあり方を再考するための視点を提供してくれる、まさに宝の山のような本となるだろう。